

野川流域における有樋尖頭器の出現と展開（1） —下原・富士見町遺跡の出土例を中心として—

鈴木美保

野川流域における有樋尖頭器の出現と展開（1） — 下原・富士見町遺跡の出土例を中心として —

鈴木美保^{1*}

要 旨

有樋尖頭器は後期旧石器時代後半期に東日本の広範に分布する石器器種であるが、その起源や変遷過程についてはよくわかっていない。南関東地方の武蔵野台地では90年代より資料が蓄積しており、最近その議論が活発化している。野川中流域の立川面に位置する下原・富士見町遺跡では、複数の時期にわたる有樋尖頭器関連資料が多数出土している。同様の規模の石器群は今のところ他にはなく、その時間的変遷過程の読み解きは野川流域の有樋尖頭器石器群の起源と展開を解明するのに重要な知見をもたらすと考えられる。

本論では上記視点に立ち、下原・富士見町遺跡の有樋尖頭器関連資料を分析し、その結果、第一段階では領域外から複数の（男女倉型、東内野型）有樋尖頭器石器群が入ってきて、第二段階でそれらが融合、在地化し、第三段階で小型化、斉一化して、槍先型尖頭器石器群へと移行していくという仮説を提示した。時期としては第一段階が砂川期直前のIV下・V層の後半段階、第二段階が砂川期前半、第三段階が砂川期の後半からナイフ形石器終末期と位置付けた。本仮説はさらに野川流域や武蔵野台地出土資料との照合を行い検証しなければならない。

キーワード：有樋尖頭器、下原・富士見町遺跡、野川流域、男女倉型、東内野型

1. はじめに

「有樋尖頭器」¹⁾は「岩宿遺跡」発見の契機となった石器であることはよく知られるところであるが、その発見から70年以上を経た現在でも実体の掴みにくい石器器種のひとつである。1970年代以降、長野県男女倉遺跡、青森県大平山元遺跡、千葉県東内野遺跡、平賀一ノ台遺跡などで先端部面取り削片剥離を特徴とする両面、半両面加工の尖頭器の製作址が発見され、その特徴である面取り削片剥離技術は「男女倉技法」（森嶋 1975）、「大平山元技法B」（三宅 1980）などと呼ばれ、その編年的位置づけや技術形態学的変遷、地理的変異などの特徴が議論されることとなった（堤 1988, 1989, 伊藤 1989）。出土例が増加し、東日本の広範囲での分布が明らかになる一方で、関連する石器を出土する石器群の有り方や技術

形態学的な時空間変異が大きい上、多くの地域では層位的な分解能がほとんどないAT上位からの出土とあって、当該石器器種だけを取り上げての詳細な時空間的な変遷過程についての議論は困難である。そんな中、須藤（2005, 2006, 2014）は一連の論考で東日本の広範囲から出土した有樋尖頭器関連遺物を各地のナイフ形石器との技術形態学的関連において、あるいは両面調整技術構造の中でとらえることにより、その技術的な起源は古北海道的な削片系細石刃剥離技術に遡り、その技術が古本州島東北地域で組み替えられて南進し、各地のナイフ形石器の開発に影響を与えたとの仮説を提示した。削片系両面調整石器・技術がLGM（最終氷期最寒冷期）へと向かう寒冷化に伴う人類集団とそれに伴う技術の南下を示す証拠の一つであるという大きな枠組みについては、個別の遺跡における年代的検証はなお必要と思われるものの須藤の一連の論考において一定の根拠は示している

1 明治大学黒耀石研究センター 〒101-8301 東京都千代田区神田猿樂町1-6-3 明治大学猿樂町第三校舎
* 責任著者：鈴木美保（comet35mst@jcom.zaq.ne.jp） 受付：2024年12月13日 受理：2025年1月13日

ようにみえる。一方、当該石器・技術が人の移動に伴って南下、西進したとして、個別の地域で在来石器群にどのように受け入れられ、どのような影響を与えたかという具体的な諸相については明確にされているとはいえない。

南関東地方でも相模野台地、武蔵野台地を含む荒川低地より西側の地域は列島内でも AT 上位の層位的分解能の高い地域で、かつ発掘調査件数が多く、こうした編年の考察が必須の分析には適した地域といえる。当該地域における有樋尖頭器の初源から消滅までの展開を明らかにすることは東日本における人類集団の LGM への適応の一端を詳らかにすることになる。

本論では、上記命題を念頭に置きつつ、さらに小地域となる武蔵野台地の野川流域石器群での有樋尖頭器の起源と展開を考察する。武蔵野台地における有樋尖頭器の出土遺跡の分布を見ると台地上に均等に分布しているわけではなく、明らかに台地南端部の野川流域に出土遺跡が偏在していることが確認できる（図 1）。特に野川の中流域に位置する下原・富士見町遺跡では立川ローム

IV 層下部から III 層にかけて 122 点（115 個体）の尖頭器が出土し、そのうちの 36 点が樋状剥離を有する。115 個体の中には明らかに草創期尖頭器と思われる資料も少数含まれているが、IV 層上部から III 層にかけての槍先型尖頭器を主体とする文化層に属する集中部はなく、ほとんどの尖頭器がいわゆる IV 下・V 層段階（段階 V）からナイフ形石器終末期段階（段階 VII）に属する尖頭器である（諏訪間 1988）。この時期の尖頭器をこれほど出土した遺跡は武蔵野台地、相模野台地を通じて他に例がなく、1 遺跡内で層位的に時間的な変遷も追うことができる良好な資料である（鈴木 2015）。筆者は当該遺跡の発掘調査、整理作業に関わり、報告書の執筆も分担したが、調査方針により、層位的区分の方法が旧石器時代の報告書で一般的な方法とは少し異なっているため、時間的關係が読み取りにくい部分がある（鈴木 2015, 2016）。本論ではその点も考慮しつつ、下原・富士見町遺跡の有樋尖頭器の時間的な変遷を中心に野川流域出土の有樋尖頭器の起源と展開を考察する。

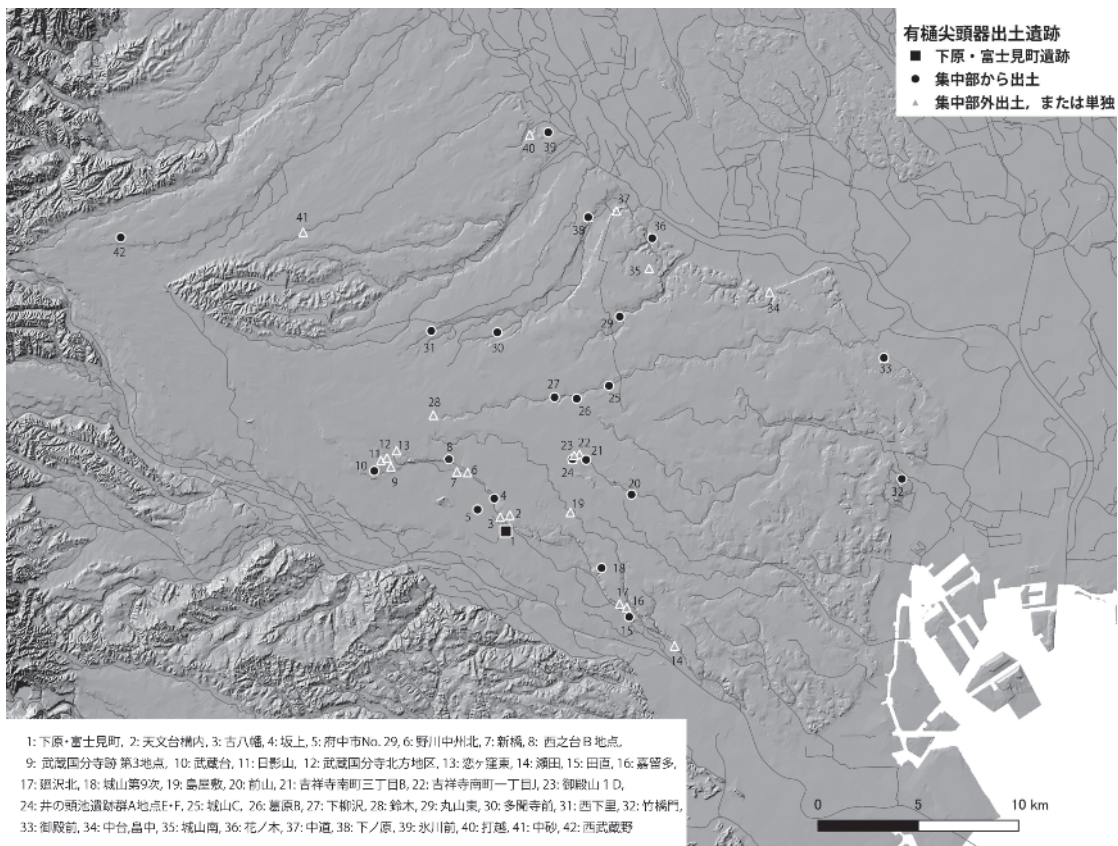


図 1 武蔵野台地における有樋尖頭器出土遺跡の分布（国土地理院基盤地図情報数値標高モデルをもちいて QGIS にて作成）

2. 研究史にみる問題の所在

有樋尖頭器については 80 年代ごろまでは層位的分解能が高く、出土資料も比較的多かった相模野台地での研究が編年的研究をリードしていた。いわゆる相模野編年が確立する中で、有樋尖頭器は深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層や中村遺跡 D 地区第Ⅴ文化層など B1 層下部から出土する砂川期石器群（相模野Ⅳ期前半、段階Ⅵ）に伴う石器であった（鈴木・矢島 1978, 諏訪間・堤 1985, 諏訪間 1988）。この時期、石器群を構成する石材に占める黒曜石の割合は前段階より減少しているにもかかわらず、有樋尖頭器の主要な素材は黒曜石で、石器群の中では原石から製作された痕跡が見られないあり方から客体的石器器種、搬入品であると解釈され、黒曜石の原産地である中部高地の男女倉遺跡群など大規模な有樋尖頭器製作址石器群との関係が焦点となった。切出し形ナイフ形石器や角錐状石器と共伴する男女倉遺跡群は相模野編年のⅢ期（段階Ⅴ）、Ⅳ下・Ⅴ層段階に位置づけられるとされ、砂川期が主体の南関東地方との傾斜編年が想定され、中部高地が平坦剥離による面的加工の尖頭器の起源ではないかという考え方が優勢であった²⁾。

もう一つの論点は、技術形態学的な変遷である。有樋尖頭器を形態的に左右対称で長幅比が大きく断面凸レンズ状の男女倉型と左右非対称で長幅比が小さく断面かまぼこ状の東内野型の大きく 2 タイプに分けられることが示され、その編年的関係についても注目されていた（堤 1988, 1989, 伊藤 1989）。南関東でも荒川低地より東の下総台地では東内野型尖頭器を主体とする遺跡が多数見つかっていたが、下総台地では層位的な位置づけが難しかったために男女倉型尖頭器との関係が注視されたのである。しかし、当時東内野型尖頭器は相模野台地、武蔵野台地ともにほとんど出土例はなく、長久保遺跡（諏訪間 1983）や江戸城址北丸遺跡竹橋門地区（伊藤 1991a）といったわずかな事例から、男女倉型が古いのではないかという予測がたてられていたが（堤 1989, 伊藤 1989）、その背景には黒曜石原産地である中部高地を尖頭器の起源と想定する考え方が少なからず影響を与えていたようである。

こうした状況は 90 年代以降に徐々に変化してきた。相模野台地では用田鳥居前遺跡第Ⅵ文化層（かながわ考古学財団 2002）や高座渋谷団地内遺跡第Ⅴ文化層（県営高座渋谷団地内遺跡発掘調査団 1995）、大和市 No.210 遺跡（大和市教育委員会 1999）で L2 層、B2U 層に遡る平坦剥離による面的加工の尖頭器出土例が検出された。相模野台地での尖頭器の初源がⅣ下・Ⅴ層段階（段階Ⅴ）まで遡るとなると中部高地の黒曜石原産地有樋尖頭器石器群との時間的傾斜編年は想定しづらく、尖頭器が中部高地を起源とするという仮説は成立しにくくなる。

L2 層以下出土の尖頭器は非黒曜石の頁岩やチャート素材として製作の痕跡を残し、形態的には左右非対称で長幅比が小さい東内野型が多いという特徴に加え、樋状剥離を施さず、素材剥片縁辺の一部を素刃のまま残すことで外見上、あるいは機能的に有樋尖頭器と同等な尖頭器に仕上げるという段階Ⅵに伴う尖頭器とは異なる特徴を持ち合わせている。この特徴はⅥ下・Ⅴ層段階の切出し形ナイフ形石器と尖頭器間に高い親和性があると解釈され、台地内での出現と展開のシナリオが描かれた（栗原 1999, 2005）。

武蔵野台地では 90 年代以降に有樋尖頭器関連資料が圧倒的に増加した。主要な資料として花ノ木遺跡（西井 1994）、西武蔵野遺跡（西井 1996a）、府中市 No.29 遺跡（東京都埋蔵文化財センター 1996）などがあげられるが、調整加工の痕跡が残されている遺跡が散見され、かつ尖頭器関連資料以外のナイフ形石器などの石器器種との共伴が少ないなど相模野台地とは異なる特徴が多く、その位置づけは現在も定まっているとはいいがたい。2001 年に千葉県房総風土記の丘の企画展「槍の身振り」に伴って開催された公開シンポジウム『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉』で武蔵野台地の様相が国武（2001）によってまとめられた。武蔵野台地の有樋尖頭器資料をⅣ下・Ⅴ層段階からナイフ形石器終末期、武蔵野Ⅲb 期後半にわたって体系的にまとめたのは最初の論考ともいえるだろう。本論考中では有樋尖頭器はⅣ下・Ⅴ層段階で出現し、本格的に展開する砂川期を経て、ナイフ形石器終末期に樋状剥離を施さない尖頭器製作に取り込まれていくという変遷が描かれている（国武 2001）。展開期であ

る砂川期において、男女倉型と東内野型の現れ方に武蔵野台地の北東部と南西部で石材消費過程を含め地域差が生じていることが示されている。その後、さらに下原・富士見町遺跡（明治大学校地内遺跡調査団 2015, 2016a, 2016b）、田直遺跡（東京都埋蔵文化財センター 2017）と有樋尖頭器関連遺物を多く出土する遺跡が報告されると、武蔵野台地の有樋尖頭器関連遺跡に関する論考が続けて発表された（堀 2017, 伊藤 2018, 2019）。堀（2017）による論考では、有樋尖頭器出土石器群の行動論的關係に焦点が当てられているが、伊藤（2018, 2019）による論考は当該期の編年を大きく書き換えるものである。伊藤は「出土深度」という IV 層中の相対的な深さを示すような指標を算出し、石器群の位置づけを見直している。その結果、有樋尖頭器関連石器群の多くが伊藤のいう「IV 中 2 重段階」（伊藤 1991b）すなわち武蔵野編年の IIa 期後半（小田 1980）、IV 下・V 層段階の後半に位置づけられ、砂川期に位置づけられる石器群がほとんどなくなってしまうという。結論として「樋状剥離を有する尖頭器独自の製作・利用は概ね IIa 期後半、従来言われている IIb 期前半には一般的でなくなってしまう、時間幅の狭い石器群である。」（伊藤 2018: p.50）と評価している。伊藤の論考（2018, 2019）の中で下原・富士見町遺跡出土の有樋尖頭器関連資料も一部取り上げられているが、正しく評価されているとは言い難い部分も見られ、この新しい編年案に肯首し兼ねる部分もままある。堀（2017）も指摘しているように下原・富士見町遺跡出土の有樋尖頭器関連資料出土の石器集中部は帰属時期も作業内容も多様である。本遺跡資料の詳細な分析が野川流域、ひいては武蔵野台地の有樋尖頭器関連資料の解釈に非常に重要な情報をもたらすことは明らかである。

以上で見てきたように、注目すべき問題点は大きく 2 点ある。一つは技術形態学的な視点である。従来言われてきている男女倉型と東内野型の 2 類型は成立するのか、その場合、両者の関係とその変遷過程はいかなるものか。もう一つはその在り方である。伊藤（2018, 2019）は製作の痕跡の有る無しで石器群を類型化しているし、国武（2001）はさらに両面調整のどの段階の調整作業が行われたかで類型化している。また、堀（2017）は共存する石器で有樋尖頭器の伴う集中部での作業内容に注目

している。このように有樋尖頭器を伴う石器集中部の性格を吟味することが必要である。この点が、主として砂川期に構造外の石器として評価されてきた相模野台地の有樋尖頭器とは異なる点であり、武蔵野台地での位置づけを困難にしてきた点であると評価できる。

3. 下原・富士見町遺跡の有樋尖頭器

3-1 遺跡の概要

下原・富士見町遺跡はその流域に旧石器時代遺跡が多数分布する東京都、野川の右岸、立川段丘面上の遺跡で、現在の行政区分では三鷹市と調布市の境界線上に位置する（図 1, 1）。明治大学付属中学・高等学校建設に先立ち明治大学校地内遺跡調査団によって、2004 年度に試掘調査が翌 2005 年度から 2007 年度にかけて本調査が行われた。調査面積はおおよそ 20,000㎡で、旧石器時代から近・現代の戦争関連遺構に至る複数の時代の遺物・遺構が検出されたが、特に旧石器時代は立川ローム IX 層から III 層相当層までに約 28,000 点の石器と約 57,000 点の礫を出土し、148 カ所の石器集中部と 306 カ所の礫群が認められている（明治大学校地内遺跡調査団編 2015, 2016b）。中でも IV c 層から IV a 層の下部に垂直分布のピークを持つ石器集中部が 118 カ所で全石器集中部の約 80%を占める。

3-2 基本層序と垂直区分帯

発掘区の北側は野川低地であり、遺跡が立地する立川面との比高は 1～1.5m である。基本層序を図 2 に示した。最下部に立川礫層、上に立川ローム、黒色土層と続くが、黒色土層は多くの地点で上部が削平されており、その上を整地層が覆っていた。黒色土層は近隣地区の遺跡調査の標準層序区分に従って IIa～II d 層に区分、立川ローム層は野川遺跡の調査で確立した武蔵野台地の標準的な層序に従って区分し、最も層厚の厚い IV 層は IV a～IV c の 3 枚に区分した。V 層は第一黒色帯、VI 層は AT 包含層、VII 層は第二黒色帯上部に相当するが、遺跡に残されているのは VII 層の上部のみで、VII 層下半部以

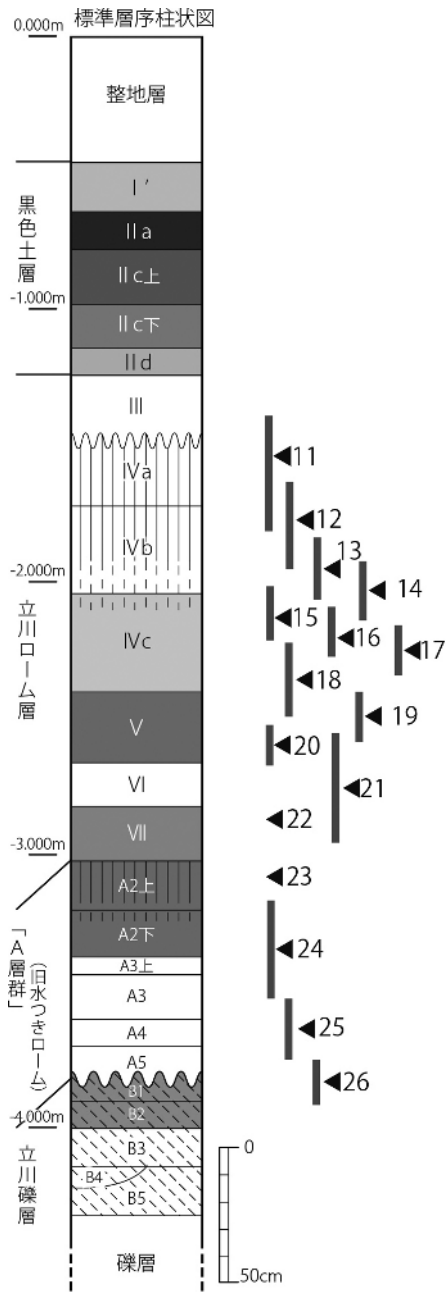


図2 下原・富士見町遺跡の標準土層図 (明治大学校地内遺跡調査団 2015)

下は変質したローム質土層が堆積していた。この変質したローム質土層は従来「水つきローム」として一括されていたが、近隣の野水遺跡の調査 (調布市遺跡調査会 2006) や本遺跡での調査では遺物が再堆積とは考えられない状況で出土、「水つきローム」を砂、シルトからなるB層群とスコリア粒も含むローム質土層のA層群に分離した。本論で関係する層序は第一黒色帯より上のIV層からIII層にかけてで、ATの下位となる土層についてはあまり関係しないようであるが、本遺跡の地形面の成り立ちと深くかかわっており、遺跡の立地と石器群

の関係を議論する際に重要な視点となろう³⁾。

旧石器時代の遺跡調査では通常、石器集中部と文化層という石器の平面、垂直分布の単位の組み合わせで、石器に関わる様々なデータを検討する。同一文化層の石器はかなり短い時間幅の中で残されたまとまりであると考えられており、接合作業、器種組成や石材組成などの分析の単位とされる。本遺跡調査でも当初は従来通りに石器集中部、文化層の認定を試みようとしたが、発掘時所見での垂直分布のまとまりを超えて石器が接合する事例が多数看取されたため接合作業を平面分布、垂直分布で区分することなく行った。その結果、集中部、文化層の区分が極めて困難となったため、報告時はあくまで、出土状況を客観的に表現する単位としての石器集中部 (BL)、垂直区分帯を設定した (野口 2015)。設定の具体的な方法については報告書 (市川・鈴木 2016) を参照してほしいが、まずは発掘区内の土層断面図をつなぎ合わせて作成した仮想 3D 細分層位モデルに石器の三次元位置情報を落とし込み、すべての石器に細分層位を与え、平面的な集中部 (BL) を認定、集中部内の石器の細分層位ごとの点数をカウントしてそのピークで帰属する垂直区分帯を決定している⁴⁾。

垂直区分帯は 11～26 の 16 に区分されている。22～26 の 5 区分帯が AT 下位に相当し、21～11 の 11 区分帯がその上位である。その内、有樋尖頭器関連遺物が出土しているのは 12～18 の 7 つの区分帯で層位的には立川ロームの IVc 層中位～IVa 層に相当する。出土集中部数が多いのもちょうどその範囲の区分帯で合計 117 ヲ所に及ぶ。各垂直区分帯の石器の特徴は概ね武蔵野台地の編年に相応して変遷するものの、個別の集中部を対象にすると必ずしも帰属の垂直区分帯に相応しているものばかりではない (鈴木 2015)。特に発掘区の北側のエリアでは接合関係を見ると垂直区分帯 12 (IVa～b 層) の集中部と 18 (IVc 層中部) の集中部間で頻繁な接合関係を見せ (明治大学校地内遺跡調査団 2016a)、各集中部の垂直分布が幅広いピークを示したり (BL1804 など)、上下に離れて 2 ヲ所のピーク示したり (BL1224 など)⁵⁾、2 枚の文化層の集中部が平面的に重なった状態で出土している様相を示している。

個別の集中部の時間的關係を一つずつ取り上げて議論

することは困難であるが、接合関係の吟味によりエリアごとの大まかな時間的關係は明らかにされている（鈴木 2016, 明治大学校地内遺跡踏査団 2016a：附図-53）。それによれば、総数で 1,365 例の接合例がある中、発掘区の北側のエリア（以降 N エリア）と南側のエリア（以降 S エリア）（図 3 参照）間での接合例はわずか 2 例である。分布する集中部の垂直区分帯を見ると N エリアは 11～13 と 17・18 が圧倒的に多く、一方 S エリアでは 14～16 が多くなっている。大まかな石器群の編年的な位置づけによれば、垂直区分帯 17・18 は、国武（2003）のいう「V 層・IV 層下部段階最新段階」、伊藤（1991b）の「IV 中 2 亜段階」に相当する。14～16 は砂川期でも比較的大型の石刃製ナイフ形石器が伴う時期で、11～13 は小型石刃製ナイフ形石器を伴う砂川期でも後半段階、もしくは、ナイフ形石器終末期と考えられる（鈴木 2015）。つまり、おおむね N エリアの BL は IV 下・V 層段階の後半に帰属するか、砂川期の後半に帰属する BL で、S エリアから出土する BL は砂川期の前半に帰属する BL である可能性が高いということが言えるのである。ただし、垂直区分帯 16 は層位的に「V 層・IV 層下部段階最新段階」と「砂川期前半段階」の境界付近で

あり、個別の BL の位置づけには接合関係のある他の BL の様相や出土石器の技術的様相の吟味が必要となる。

3-3 出土有樋尖頭器

3-3-1 分析対象・分析方法

さて、表 1 に石器集中部ごとの尖頭器と有樋尖頭器削片の出土状況を示した。

要約すると：

- ① 尖頭器関連石器出土の BL は 40 カ所。
- ② そのうち有樋尖頭器が出土した BL は 19 カ所。
- ③ 尖頭器 + 削片が出土している BL は 9 カ所。
- ④ 削片のみが出土している BL は 1 カ所（BL1806）。
- ⑤ 有樋尖頭器は BL から 30 点、BL 外から 6 点、計 36 点。
- ⑥ 尖頭器関連石器出土の BL は、N エリアは 17 カ所で尖頭器 50 点、S エリアは 23 カ所で尖頭器 51 点。尖頭器 115 点に対して、樋状剥離尖頭器は 36 点と樋状剥離が認められない尖頭器が多いように感じるが、樋状剥離のない資料には破損品で先端部が確認できないものが多く含まれている。また、N、S 両エリアの出土状況は BL 数、出土点数から見るとエリア間であまり差が

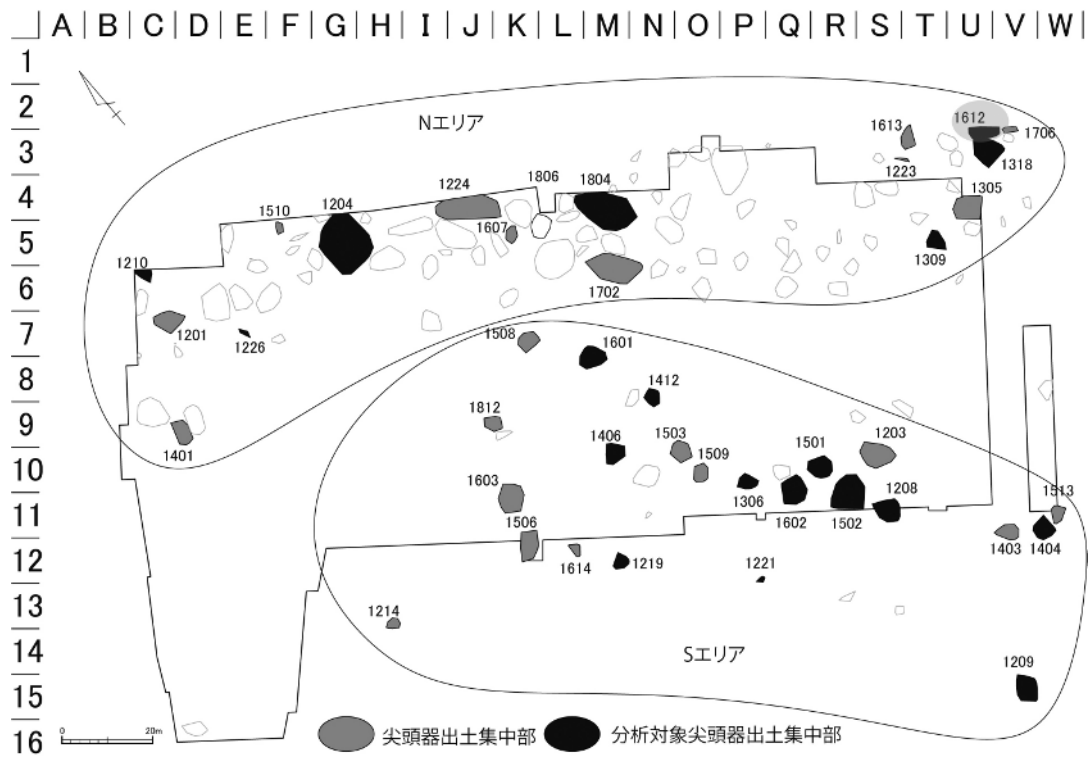


図 3 下原・富士見町遺跡 有樋尖頭器出土石器集中部分布

ないように見えるが、N エリアでは BL1612 から 22 点、BL1804 から 8 点と特定の BL からまとまって出土していて、残りの BL からは 1・2 点の出土で、S エリアではどの BL からも 1～5 点が出土していて BL 間にあまり偏りが見られず、両エリア間で異なっている。

まず、技術形態的な分析をするために、完形、ほぼ完形の資料を分析対象とした。15 ヶ所の集中部から出土した 45 個体（2 点が接合して完形・ほぼ完形になっている個体を含んでいる）と集中部外出土の 4 個体の計 49 個体である。学史的には技術形態学的に男女倉型、東内野型の大きく 2 類型に分けて検討されてきたことを

見てきたが、出土資料の形態は実際には非常に多様であり単純に 2 類型に分類できないこともわかってきている（伊藤 2019）。そこで、完形、ほぼ完形の個体の法量的な分析を通して有樋尖頭器の形態区分が可能かどうかを吟味し、類型化した有樋尖頭器を各エリア、集中部に戻して、時間的変遷や集中部のあり方などを考察することとする。

形態的分析に用いた法量は尖頭器の長さ、幅、厚さ、TCSA（Tip cross-section area）、TCSP（Tip cross-section perimeter）（Sisk and Shea 2011, 佐野ほか 2013）である。TCSA、TCSP に関しては、すなわち尖頭器の

表 1 下原・富士見町遺跡 尖頭器出土石器集中部（BL）一覧

BL	尖頭器						削片					製作痕跡	エリア	備考
	Ob	An	Tu	Ch	Sh	計	Ob	Tu	Ch	Sh	計			
1201				1		1						無	N	体部だけ
1203	1					1						無	S	先端だけ樋状剥離無 尖頭器？
1204	3					3	1				1	有？	N	
1208	1					1						無	S	
1209	5					5	3				3	有	S	ナイフが搬入
1210					1	1						無	N	
1214	2					2						無	S	
1219	2				1	3						無	S	頁岩は未製品
1221					2	2	1				1	無	S	2 点同一個体 集中部に帰属しているか疑問
1223	1					1						無	N	
1224	1					1						無	N	
1226	1					1						無	N	
1305					1	1						無	N	詳細不明
1306	2					2						無	S	
1309	1					1						無	N	
1318	3					3	2				2	無	N	1612 に隣接
1401					1	1						無	N	尖頭器？未成品？ほぼ腹面加工のみ
1403			1			1						無	S	大型、破損品 石器製作の痕跡がほとんどない
1404	3				1	4						有？	S	Ob1 点 彫器ブランクのようにも見える
1406	1					1						無	S	
1412	1					1						無	S	急斜度周縁加工尖頭器？
1501	2		1			3						無	S	
1502	4					4	4				4	有	S	
1503	1	1				2						無	S	大型優良品
1506	1					1	2				2	無？	S	
1508	1					1						無	S	
1509	4					4						無	S	破損品ばかり
1510	1					1						無	N	
1513	1					1						無	S	
1601	3			1	1	5			1		1	無？	S	接合により 4 個体 石刃スクレーパー
1602			1			1						無	S	有樋尖頭器ではない
1603	1					1						無	S	ナイフ多数（Tu）だが製作痕跡無
1607	1					1						無	N	平坦剥離の尖頭器ではない
1612	18			4		22	3				3	有	N	石核あり
1613	1					1						無	N	男女倉型ナイフ
1614	2					2						無	S	
1702	2					2						無	N	角錐？調整異なる ナイフ形石器の製作が顕著
1706	1					1						有	N	1612 の東となり
1804	5	3				8	1	1			2	有	N	1224 との接合関係吟味 12 の可能性もあり
1806										1	1	無	N	
1812	2	1				3						無	S	風倒木がらみ 1104 と同一集中だった可能性
集中部外	11	2		1		14								
計	90	7	3	7	8	115	17	1	1	1	20			

*Ob: 黒曜石, An: 安山岩, Ch: チャート, Sh: 頁岩
トーンのかかっている集中部は分析資料（完形、ほぼ完形）を出土している集中部

使われ方を示す指数であると理解している訳ではないが、飛び道具としての尖頭器の有効性とは一定の相関を持つ指数ではないかと考えている。また、結果はNエリア、Sエリアに分けて考察するほか、NエリアのBL1612も区別しておく。BL1612は1集中部で22点の尖頭器を出土しているほか、尖頭器と同一母岩の石核を含む尖頭器製作痕跡であるなど、様々な点で他の集中部とは異なる様相を見せているためである。

3-3-2 類型区分

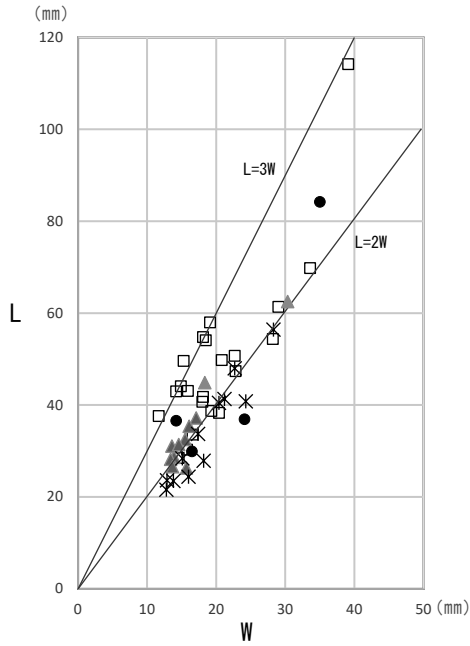
有樋尖頭器を含む尖頭器の法量の分析結果を図4に示す。1、2はそれぞれ長さと幅、厚さと幅の相関である。幅と厚さに関してはSエリア出土の尖頭器に $T=1/2W$ を超える厚手のものが若干多い傾向があるが、大部分の尖頭器は $T=1/3W$ から $T=1/2W$ の間に収まっている(図4.2)。一方、長さに関してもSエリアとNエリア間で明確な違いがみられる。尖頭器は大まかに $L=2W$ に相関するものと $L=3W$ に相関するものの2類型に分類できそうである(図4.1)。そして、長幅比が小さい類型のものはSエリア、Nエリアのどちらからも出土しているが、長幅比が大きい類型のものは1点の集中部外を除けば、すべてSエリアからの出土であるということになる。さらにNエリアでもBL1612出土のものは幅にかなりのばらつきがみられるが、他のNエリア出土のものは法量的にはかなり形態的な斉一性がみられるといえるだろう。

そこで、長幅比とTCSA、TCSPとの相関を見てみると、長幅比2.5以上の長狭な形態のものは非常に大型の1点を除けばTCSA、TCSPともにかなり均一で、これらの一群にも形態的な斉一性がみられるといえるが、一方で、長幅比が2.5以下の幅広い形態のものは長狭な形態のものよりもTCSA、TCSPにばらつきがみられる(図4.3・4)。なお、幅広い形態のものもBL1612以外のNエリアの尖頭器だけに注目すれば、形態的な斉一性はかなり強いといえるだろう(図4.3・4)。TCSA、TASPのエリアごとの箱ひげ図を図4.5・6に示した。これを見てもNエリアから出土している尖頭器の斉一性が支持されるだろう。

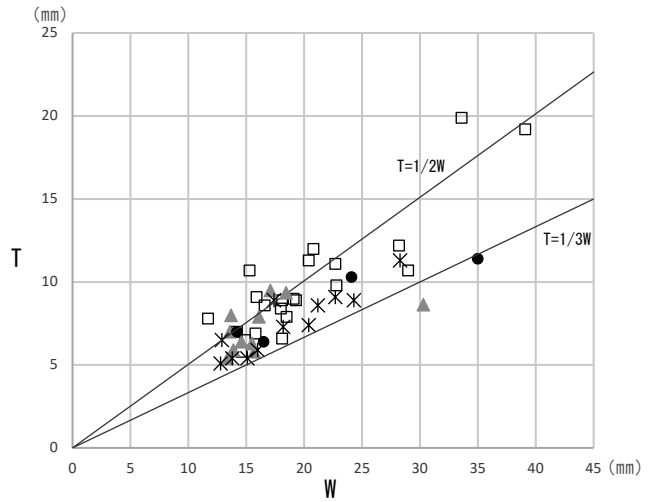
図4.3・4のグラフを元に下原・富士見町出土尖頭器を類型区分した。TCSPが外れて大きいもの(45以上)

をS類とした。S類を除く尖頭器は長幅比2.5以上と以下でA類とB類に、さらにばらつきの大きいB類をTCSAが100以上と以下で2区分し、B1類とB2類とした(図4.3・4)。TCSA=100を境に区分したのはA類のTCSAがすべて100以内に収まることと、Nエリア出土の尖頭器が1点の外れ値のものを除けばすべて100以下を示していることによる。また、S類に区分した尖頭器の中でTCSPが40台のものはTCSAではB2類と連続的なので、S'類として検討の余地を残した。類型ごとに詳細を見ていく。

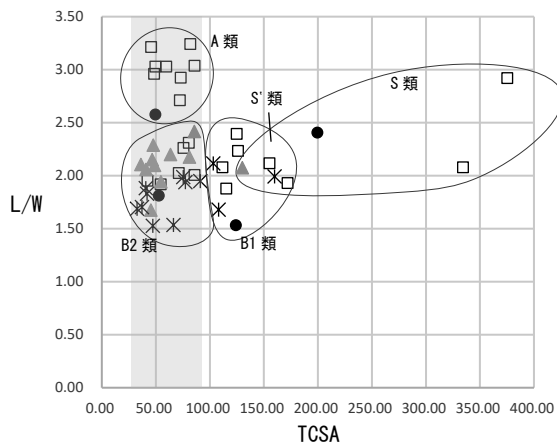
S類(図5)：S類は出土尖頭器の中で大型の一群である(図5)。1は長幅比が大きく左右対称の男女倉型といえる。頁岩製で長さが110mmを超え、本遺跡出土最長の尖頭器である。3は長幅比が2.08と幅広だが、左右対称であり東内野型とはいえない。頁岩(千葉嶺岡産)製で厚みが減じ切れておらず、未成品の可能性ある。2・4～6は左右非対称で東内野型といえるが、形態的には多様である。最大幅の位置が2は器体のほぼ中央、4は中央よりやや下で肩部を有し、5・6は中央よりやや上に位置している。5・6は片面の周縁加工である。5が安山岩製のほかは黒曜石製で外見上は信州系と思われる。いずれも非常に薄手で、精巧な作りである。4～6はS'類に区分したもので、法量的には、B1類と連続的であるが、B1類とは精巧な作りの点で区別できそうである。本類型の共通点は大型で、非常に精巧な作りのものを含むという点であり、形態は多様である。また、2がBL外から出土しているほか、3以外はすべてBLの外縁から出土し、BLとの一括性が疑われ、時期については特定できない。未成品と思われる3の尖頭器のみBL1404の中心部から出土している。BL1404は西隣のBL1403、南に数m離れたBL1209と複数の接合関係がみられ同時期性が高い。3か所のBLからは合計で10点の尖頭器が出土しており、BL1209からは削片も3点出土していて、BL1404とBL1209は尖頭器製作の痕跡が認められる。頁岩製の石刃素材ナイフ形石器を相伴しており、砂川期に帰属すると考えられる。S類を区分したのは、すべてとは言わないが、大型で精巧な一群はA類、B類に区分した小型の尖頭器とは機能的に異なっているように考えられ、区分することで、技術形態的なまとまりがより



1. 長さ / 幅 相関図

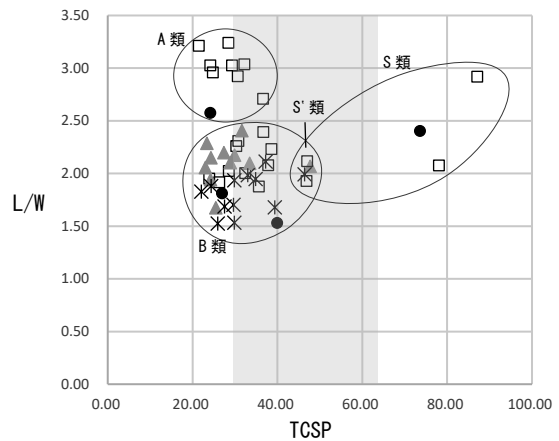


2. 厚さ / 幅 相関図



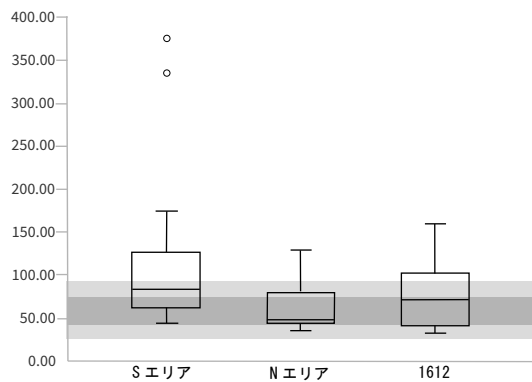
3. 長幅比 / TCSA 相関図

トーンの範囲は民族誌データによるダーツの範囲 (佐野ほか 2013)



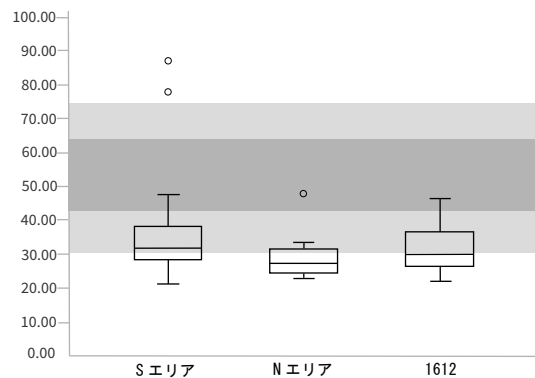
4. 長幅比 / TCSP 相関図

トーンの範囲は民族誌データによるダーツの範囲 (佐野ほか 2013)



5. 各エリアの TCSA 箱ひげ図

トーンの範囲は民族誌データによるダーツの範囲
濃い部分は第1四分位点から第3四分位点の範囲 (佐野ほか 2013)



6. 各エリアの TCSP 箱ひげ図

トーンの範囲は民族誌データによるダーツの範囲
濃い部分は第1四分位点から第3四分位点の範囲 (佐野ほか 2013)

図4 下原・富士見町遺跡出土有樋尖頭器の度量

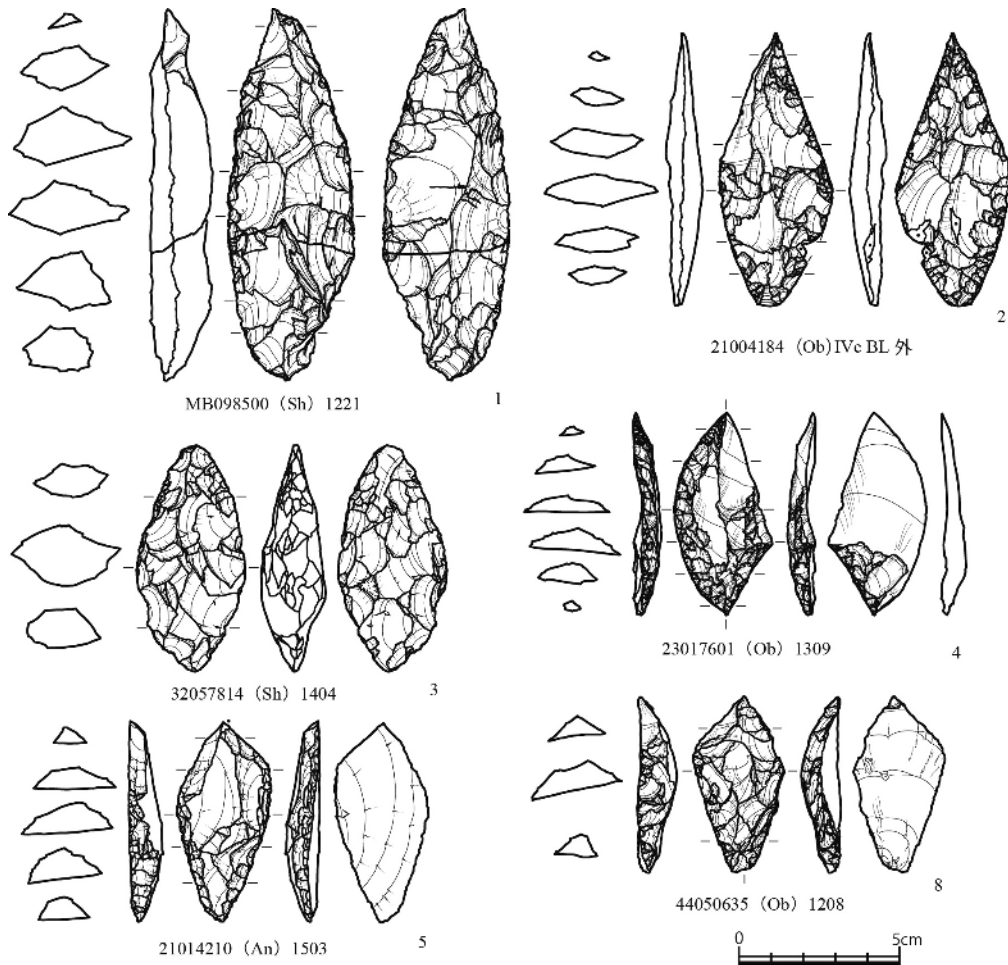


図5 下原・富士見町遺跡出土有樋尖頭器 1 類型 S

捉えやすいのではないかと考えたからである。

A 類 (図6) : 長幅比が2.5以上となる尖頭器である。樋状剥離がなく片面周辺加工の尖頭器が1点あるが (図6.3), それ以外は透明黒曜石製で樋状剥離を有し, 半両面から両面加工の尖頭器である。周辺加工の3は比較的良好の凝灰岩剥片製, 剥片からの加工度は高くないが左右対称性が強く, 帰属する集中部 (BL1601) に同一母岩の石器を持たない搬入石器と思われる。先端部をわずかに欠損しているが, サイズは黒曜石製の1・2とよく一致している。残りの黒曜石製の尖頭器はいわゆる男女倉型の範疇のものといえるが, 左右対称というよりは背部が弧状に加工され, 樋状剥離側の側縁は若干直線状で (図6.4~6) く字型を呈しているものもある (図6.1・2)。7は樋状剥離面が背面に対し鈍角になってしまい, 素材の下部まで達してしまった失敗品と思われる。8・9は1~7の尖頭器と比較して若干小型で左右対称性が強く, それぞれ片面加工 (図6.8), 両面加工 (図6.9) で

ある。

形態的な斉一性は強いが, 出土集中部は2と5が同じBL1501であることを除けば, それぞれ異なる。ただし集中部の分布, 接合関係を吟味するとBL1501, BL1502, BL1602, BL1406, BL1306はいわゆる同一文化層といえる時間幅の中に存在したと考えられる。つまり図6-1, 2, 3, 5, 6, 8は同一の時間幅所産である可能性が高い。これらの集中部の中でBL1502は黒曜石の剥片, 碎片を多数出土し, 有樋尖頭器削片も4点出土しており, 製作の痕跡が確認できる。共伴するナイフ形石器は縦長剥片素材で, 背部加工も顕著ではないものが多く, いわゆる石刃素材の砂川型の典型例は伴っていないが, 石材は頁岩を多く使い, 石刃素材のスクレイパー (BL1406) や彫器を多数保有しており⁶⁾, IV下・V層段階まで遡るとは考えにくい。

その他のBL1209出土の図6-4はS類の尖頭器未成品 (図5.3) を出土したBL1404と関係が深く尖頭器製作の

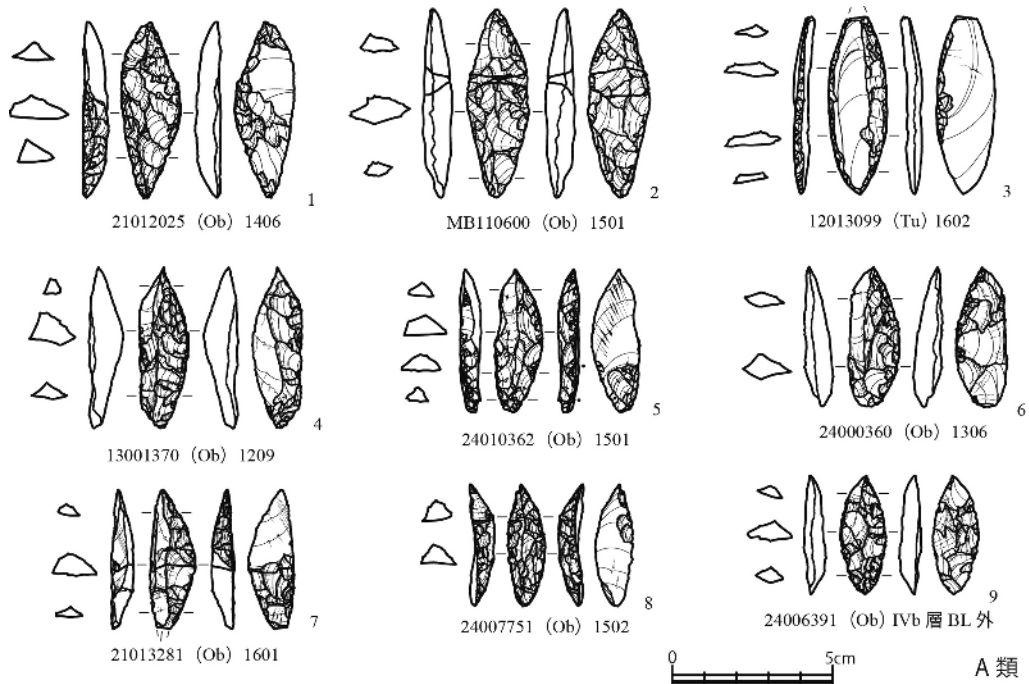


図6 下原・富士見町遺跡出土有樋尖頭器 2 類型 A

痕跡を残していることはすでに触れた。図6-7を出土したBL1601は完形の尖頭器は出土していないBL1603, BL1508と類繁な接合関係を持つが、BL1603は頁岩、凝灰岩製石刃素材の斜断二側縁加工のいわゆる砂川型ナイフ形石器を多数保有している。鈴木(2018)によればBL1603のナイフ形石器は基部の一部を平らに加工する形態のものが多く、相模野台地の様相からすると砂川期でも古い様相であるという。以上のことから、A類を出土している集中部は時間的には砂川期の前半段階に位置づけられると考えられる。そして、その中には尖頭器の調整剥離や樋状剥離を行った痕跡を残す集中部(BL1209, BL1502など)も見られる。

B類(図7): B類は長幅比が2.5以下になる尖頭器であり、A類と比較してサイズが多様である。便宜的にTCSAでB1類とB2類に区分したが、法量的には両者の間に大きな空白はなく、連続的であるといえる。須藤(2014)は面取両面調整石器の形態の多様性を、投槍利用のみでなく解体具や工具などを含む多目的に使用された管理的道具として解釈しているように、B類に区分された尖頭器はより大型のS類も含め、多様な用途に使用された可能性がある。

TCSAが大きい大型のB1類は黒曜石製(図7.3~5)が3点と頁岩製(図7.1), 凝灰岩製(図7.2)各1点の

計5点である。非黒曜石製と黒曜石で特徴が分かれているのが興味深い。非黒曜石製の2点は若干幅広ではあるが、A類と形態の特徴はよく似ている。背部が緩やかな弧状を呈し、樋状剥離面側は背部と比較して直線状でくの字型を呈する。出土集中部はBL1601とBL1501で両者ともA類の尖頭器も保有している。黒曜石製の3点は基部の片側にあるいは両側に抉りのような加工が特徴的である。背部は非黒曜石製のものと同様、緩やかな弧状に加工されているが、樋状剥離面が短く、上半部の形状は左右対称性が強い、4の資料は基部左側縁が摂理面で折れて厚みが減じられていない様子もみられ、もともと左右対称のA類尖頭器が折れて再加工されているようにも見える。出土集中部はBL1601, BL1502で非黒曜石製同様A類尖頭器を出土している集中部である。

B2類はTCSAが100以下の小型の類型である。本類型はNエリア, Sエリアの両エリアから出土しているが、両エリア間では技術形態学的な違いがみられる。図7の6~11がSエリア出土品, 12~21がNエリア出土品である。Sエリア出土品はすべて透明黒曜石を素材とし、樋状剥離を有するものは3点(図7.6・7・11), 6・7の2点は形態の左右対称性が強く、片面加工(図7.6), 両面加工(図7.7)の違いはあるが樋状剥離を施した後、側縁に加工を入れている点など両者はよく類似してい

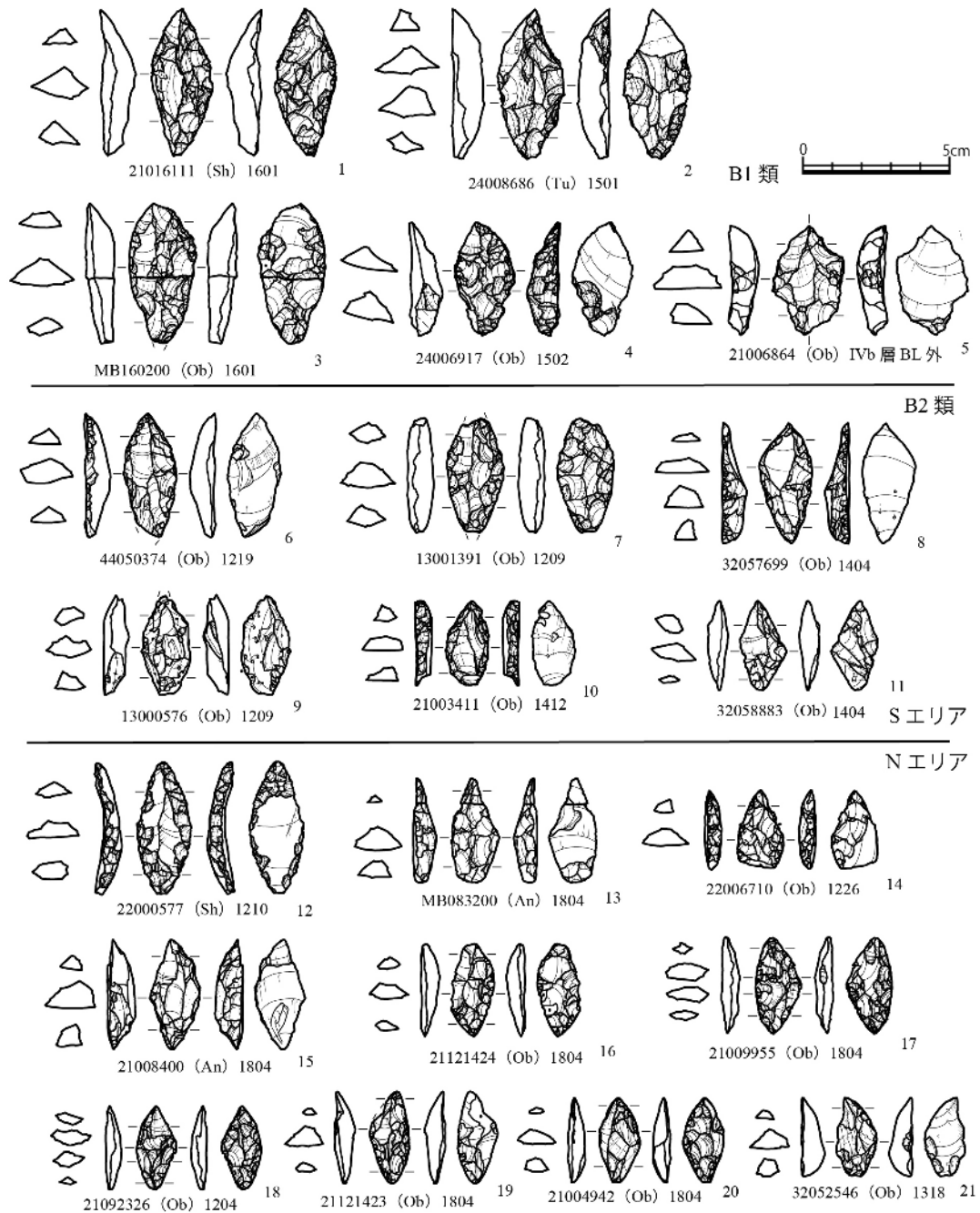


図7 下原・富士見町遺跡出土有樋尖頭器 3 類型 B

る。11 は非常に小型で左右非対称，S エリア出土品では唯一 N エリア出土品の有樋尖頭器に類似する。ただこの尖頭器は同じ BL1404 から出土している尖頭器破損品（明治大学校地内遺跡調査団 2015：図 III-5-7.1404-007）と接合し，もとは長狭な尖頭器であったことが分かっている。破損後に基部を調整しているため，完形品として扱った。9・10 は片面周辺加工品である。9 は横長剥片製で加工度も低く尖頭器としてよいか疑問の残る資料だが，A 類に区分された図 6.3 や図 7.9 など樋状剥

離を施さない周辺加工品が一定程度組成するようである。8 は尖頭部が作り出されているため尖頭器としたが，樋状剥離を施す前のブランクか細原型彫器のブランクと考えたほうがよい資料である。出土集中部は BL1209，BL1404 が 2 点ずつあるが，両集中部は接合個体を共有している同時期の集中部で，A 類尖頭器も出土している。6 を出土している BL1219 は BL1501，BL1502 など同一の時間幅と考えてよい集中部で，10 が出土している BL1412 だけは他の集中部と接合関係を持たない集中部

である。BL1412 は本尖頭器以外には頁岩、凝灰岩などの非黒曜石大型石刃素材を含む大型スクレイパーを複数組成する。非黒曜石の大型石刃素材スクレイパーは BL1406 など S エリアに分布する複数の集中部で組成しており、同様に砂川期前半の集中部と考えてよいだろう。

BL1612 以外の N エリア出土の尖頭器は法量的にはすべて B2 類に含まれる尖頭器で、技術形態学的には樋状剥離を施さないタイプ (図 7.12) と樋状剥離を施すタイプ (図 7.13 ~ 21) に区分できる。12 は頁岩製で半両面加工、左右対称の形態である。やや長めで、長幅比が大きく A 類に近い形態を呈している。13 ~ 21 の中には実際には樋状剥離が施されていない資料も含まれているが (13・14・17・19・21)、片側縁が緩やかな弧状でもう一側縁がより直線的なくの字状の形態が共通しており、ブランクと解釈した。13 は折れた先端部が接合しており、樋状剥離の失敗と考えることも可能である。石材は安山岩 (13・15) と黒曜石に限られており、特に黒曜石は非常に透明度の高い外見上よく類似した黒曜石のみが使用されている。問題はその出土集中部である。BL1210, BL1226, BL1204, BL1318, BL1804 から出土している。垂直区分帯 12・13 に帰属する集中部と垂直区分帯 18 に帰属する集中部 BL1804 である。垂直区分帯 12 と 13 に帰属する 4 つの集中部については、頁岩、凝灰岩、安山岩などの非黒曜石の石刃素材のナイフ形石器を相伴するが、S エリアで出土しているナイフ形石器と比較して、小型石刃を素材とするナイフ形石器が多く、砂川期でも後半段階、もしくはナイフ形石器終末期 (武蔵野 IIb 期後半) に位置づけられる (鈴木 2015)。一方、垂直区分帯 18 の石器群は石刃技術をほとんど持たず、小型の角錐状石器や平面形態が涙滴型、もしくは台形を呈し、斜め上に設定した素材剥片の打面部を鋸歯状の調整で除去した小型のナイフ形石器を特徴的に出土し、国武 (2003) のいう V 層・IV 層下部最新段階に位置づけられる (鈴木 2015)。このような集中部の位置づけから考えれば、BL1804 出土の尖頭器 (図 7.13・15 ~ 20) は下原・富士見町遺跡出土の尖頭器の中で、最も古いことになるだろう⁷⁾。しかしながら、ここで問題なのは BL1804 の垂直分布、および接合関係である。BL1804 が最も多くの接合個体を共有するのは BL1804 から西側

に 30m ほど離れた場所に位置する BL1224 である。発掘区の北側は野川低地に近く、IV 層が薄い上に、ローム層のソフト化が進んでおり、場所によっては IVa 層がほとんど確認できていない。したがって、垂直区分帯 18 に帰属する集中部の上に垂直区分帯 12 に帰属する集中部が重複していても区分することはできず、遺物量の多い方の垂直区分帯の集中部として扱われてしまう。個々の尖頭器の出土層位を検証してみても III ~ IVa 層が 2 点、IVb 層が 1 点、IVc 層が 5 点とまとまった層位から出土しているわけではない⁸⁾。このように、BL1804 集中部出土尖頭器の位置づけは発掘から得られたデータだけでは確実に決めることはできない。以上の点を踏まえたうえで、筆者は次の 2 つの理由により砂川期後半、もしくはナイフ形石器終末期と位置付ける。1 つは BL1204 はか N エリア出土の尖頭器との斉一性である。技術形態学的にはもちろん、黒曜石の外見上の類似からは黒曜石の原産地も同じであると予測でき、他の N エリア出土の尖頭器と同じ時期に位置づける方が合理的と考えられること。もう一つはもしも IV 下・V 層段階に帰属する尖頭器だと考えた場合、この段階に位置づけられる他の有樋尖頭器石器群と様相が異なるからである。

BL1804 は総計で 585 点の石器が出土しており、黒曜石が 357 点と 6 割ぐらいを占める、この段階の典型的ナイフ形石器は少ないものの黒曜石の不定形小型剥片剥離石核を主とする石核が 20 点出土しており、有樋尖頭器関連資料を除くとその様相は IV 下・V 層段階のナイフ形石器を主体とする典型的石器集中といえる。また BL の周囲に垂直区分帯 18 に帰属する多くの BL (1806, 1807, 1808, 1809 など) が分布し多くの接合関係がみられるあり方も IV 下・V 層段階の典型的石器集中のあり方といえる。こうした IV 下・V 層段階の典型的石器集中に有樋尖頭器が削片を伴って出土する類例は今のところ認められない。ただし、砂川期の後半段階だとしても確実な類例があるわけではなく、BL1804 出土の尖頭器の位置づけは決して断言できるわけではないことも付言しておく。

BL1612 (図 8) : BL1612 は発掘区の北東側発掘区外に位置する。本調査終了後の補足外構調査によって出土した。740 点の石器を出土し、ナイフ形石器 9 点、尖頭

器 22 点となっているが、尖頭器の多くが素材剥片の縁辺を残して槌状剥離様と同じ機能を持たせているタイプの尖頭器で、調整加工で器種区分をしているが、厳密にはナイフ形石器と区分できていない。実際、図 8-4 や 6 とよく似たナイフ形石器が存在し（明治大学校地内遺跡調査団 2015：図 III-7-29.1612-007）、分類基準が曖昧なことを露呈している。BL1612 だけ他の N エリアと別に扱ったのは、次の理由からである。BL1612 が他の集中部とは接合関係を全く持たないこと、本集中部にのみ見られる特徴が顕著であることである。本集中部にのみみられる特徴とは利用されている黒曜石がすべて不透明黒曜石であること⁹⁾と集中部内で素材剥片剥離の工程から製作されている尖頭器が存在することである。

出土尖頭器は法量による類型では A 類はないが、S' 類、B1 類、B2 類がある。ただし、類型の違いが石器の技術形態学的な違いではなく、単純にサイズの違いで、各類型が連続的である点が本集中部での特徴でもある。実際

図 7-1 と 5 はサイズが違うがよく類似しているし、図 7-3 と 6 もサイズは異なるが類似している。また、図 7-1 と 5 は 2 の石核と同一母岩と思われるほど石質が類似しており、直接接合こそしなかったが、本集中部で素材剥片の剥離工程から製作が行われた石器と考えられる。11、12、13 の石器には槌状剥離が観察される、他の尖頭器よりも小型で素材剥片からの加工度も高いので、破損などによるリダクションで再加工の際に槌状剥離によって同様の刃部を作り出そうとしたのであろう。こうした特徴は下総台地の東内野遺跡の尖頭器石器群とも類似しており、この集中部を残した集団が同じ時期に武蔵野台地上を遊動して石器群を残していた集団とは異なっていた可能性を示唆する。

この集中部の位置づけであるが、垂直区分帯 16 はちょうど IV 下・V 層段階と砂川期の端境付近で、集中部によって位置づけが異なるうえ、集中部の位置が発掘区の北側で、ロームがより安定していない場所である、他の

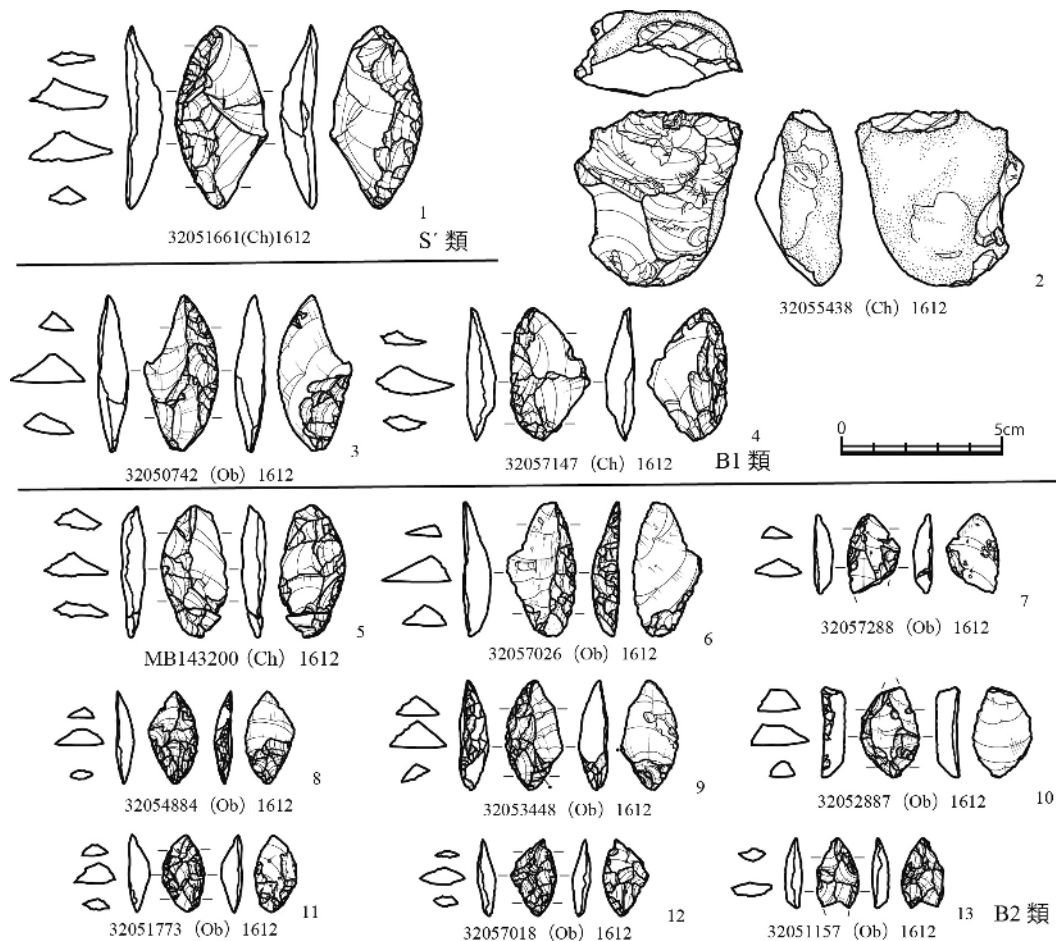


図 8 下原・富士見町遺跡出土有槌尖頭器 4 BL1612 出土

集中部とは接合関係も持たず、編年指標となるナイフ形石器の出土も少ないので、位置づけは難しい。ただ、図7-1・5の尖頭器と特徴のよく似た石器が相模原市の下九沢山谷遺跡第VI文化層から出土しており、B2層上部の出土とされている（総合文化財考古学研究室2018）。同じくB2層上部、L2層から大和市高座渋谷団地内遺跡第V文化層や大和市No.210遺跡第II文化層では尖頭器製作の痕跡が検出されている（県営高座渋谷団地内遺跡発掘調査団1995、大和市教育委員会1999）。こうした類例を評価するならば、BL1612はIV下・V層段階後半が妥当と考えられる。

3-4 まとめ (図9)

以上の結果から、下原・富士見町遺跡出土の有樋尖頭器はおおむね三段階の変遷をしていると考えることができる。第一段階はIV下・V層段階の後半でチャートと不透明黒曜石の東内野型尖頭器で、剥片の縁辺を残すことで樋状剥離を施さないタイプの尖頭器を主とすることと大型から小型の尖頭器まで連続的に存在することが特徴で、加工具を含めた多様な用途に使われたと考えられる。この段階の尖頭器を出土する集中部は一カ所だけで同じ段階の他の集中部とは石材も異なり接合関係も持たないことから、外部集団によって残されたことも示唆される。

第二段階は砂川期の前半で、尖頭器は透明黒曜石と頁岩、凝灰岩などの非黒曜石の尖頭器間で形態的な親和性がみられる。すべての集中部が尖頭器を出土するわけではないが、同時期性が想定される複数の集中部を単位として一定数の尖頭器を保有している状況がみられる。

第三段階は砂川期の後半からナイフ形石器終末期にかけての時期で、透明黒曜石の小型の東内野型尖頭器を主とする。樋状剥離などメンテナンスをおこなっている集中部と尖頭器だけを持ち込んでいる集中部がある。大きさ形態が非常に均一で、槍先としての機能に特化していると思われる。

4. 考察：野川流域における有樋尖頭器の出現と展開 (図9)

下原・富士見町遺跡出土の有樋尖頭器関連資料を見てきたが、最後にもう少し範囲を広げ、野川流域を視野にいたれた見通しを述べておく。下原・富士見町遺跡では最も古い尖頭器は東内野型の集中で、同時期に男女倉型尖頭器を出土する集中部は見られなかったが、信州系の黒曜石を主体として尖頭器の製作を行っている石器群が野川流域にも複数検出されている（堀2017、伊藤2018）。伊藤が主張するように、それらの石器群がすべてIV下・

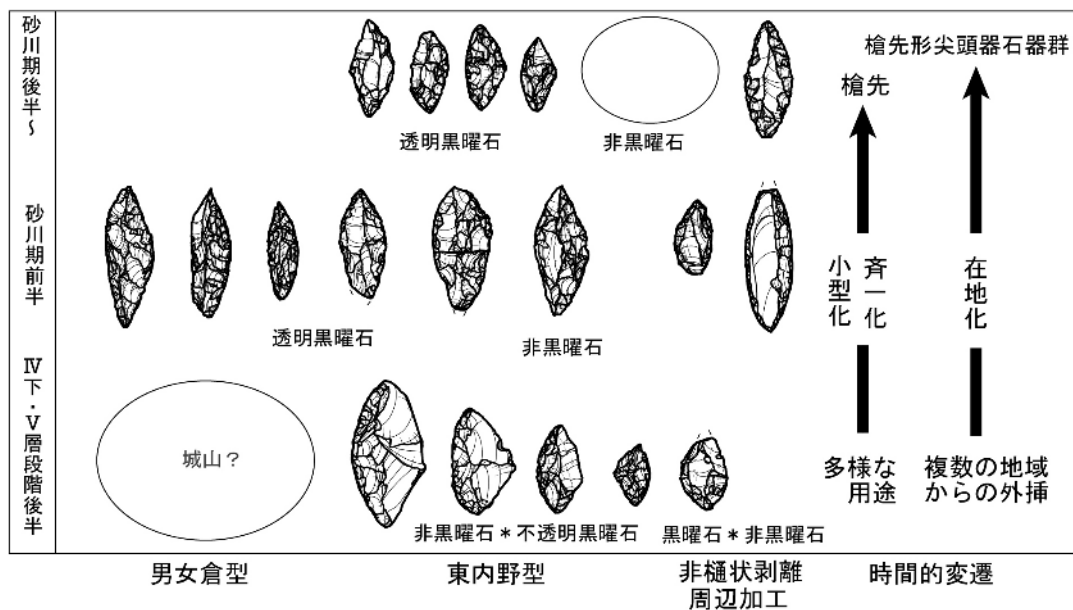


図9 下原・富士見町遺跡出土有樋尖頭器 5 BL1612 出土

V 層段階後半に遡るかについてはなお議論が必要と考えているが、確実に IV 下・V 層段階の後半に遡るものもあり、下原・富士見町遺跡の東内野型尖頭器石器群と同じ時期に男女倉型尖頭器を保有した集団も透明黒曜石を携えて野川流域に訪れているのではないだろうか。つまり、IV 下・V 層段階から砂川期へと移行する前に複数の地域から有樋尖頭器が持ち込まれ、当初は石材も、形態も異なる有樋尖頭器が、遺跡や集中をたがえて存在した。具体的な資料を挙げての詳細な考察は考を改めたいが、例えば、城山遺跡がその候補になるのではないかと考えている。そして、砂川期にその尖頭器が在地化する過程で、形態の多様化が起こり、男女倉型か東内野型か判別が難しい尖頭器が展開するようになる。下原・富士見町遺跡での尖頭器を見る限り、有樋尖頭器が展開するのはやはり砂川期と思えるが、一方で野川流域に砂川期の明確な遺跡が少なく、さらに有樋尖頭器を伴っている遺跡はほとんどない。おそらく、砂川期は IV 下・V 層段階とは遺跡のあり方が変化し、それゆえに下原・富士見町遺跡のように立川面に集約的な大規模な石器群を残したのではないだろうか。その考えると、立川面を流域に含む野川流域に有樋尖頭器出土遺跡が多く分布する偏在性を説明できる。府中市 No.29 遺跡など立川面の遺跡をさらに比較検討する必要があるだろう。

さて、東内野型と男女倉型が融合化した後、尖頭器は小型化し、槍先（ダーツか？）として均一化したと考えられる。槍先という器種の性質から考えても製作の場と使用の場が異なることが想定され、下原・富士見町遺跡と同様の石器群を見つけるのは難しいかもしれない。三鷹市の古八幡遺跡で、同様の小型の東内野型尖頭器が出土しているが、二次堆積中からの検出のようで、時間的位置づけは難しい。さらに、可能性としては黒曜石素材だけではなく、頁岩や安山岩などの非黒曜石素材の小型有樋尖頭器を保有する石器群の存在も想定できる。そして、この有樋尖頭器の小型化、斉一化が次の槍先形尖頭器石器群へとつながるのではないだろうか。

5. 今後の課題と展望

今回、下原・富士見町遺跡出土の有樋尖頭器を分析することで、野川流域の有樋尖頭器編年の指標を作成することができたと考える。一方で、本論考のタイトルである、野川流域資料については見通しを述べるにとどまった。今後、この見通しを府中市 No.29 遺跡、城山遺跡、田直遺跡など尖頭器製作、調整の痕跡を残す石器群を中心に比較検討を進めることで、下原・富士見町遺跡資料の検討から提示した仮説の妥当性を検証し、さらなる課題を抽出することができるだろう。その際に、一つ重要な課題として下原・富士見町遺跡の黒曜石資料の原産地推定分析を挙げておく。近年、原産地遺跡の男女倉遺跡や渋川遺跡の原産地分析が進んでいるだけでなく、武蔵野台地の石器群出土黒曜石の分析も進んできている。上にあげた、府中市 No.29 遺跡をはじめとした他の遺跡との比較の上でも黒曜石産地の情報は重要である。また、有樋尖頭器の初現段階の集中部 BL1612 の尖頭器には不透明黒曜石が使われており、この産地が高原山か伊豆・箱根かでは解釈が全く変わってしまう。黒曜石の産地の情報が加わることで、見えてくる展開もあるだろう。

さらに、野川流域を展望するためには、より広い武蔵野台地、あるいは南に広がる相模野台地も視野に入れることが課題となろう。そうすることで、野川流域という地域の特性が、より明確になるに違いない。

謝辞

本稿の作成にあたって、改めて下原・富士見町出土の有樋尖頭器を中心とする資料を観察する機会を得た。資料の見学にあたっては、明治大学博物館、および島田和高氏（明治大学博物館）のご高配を賜った。また、2名の査読者により本稿は改善された。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 本石器器種が様々な呼称をされてきた石器（須藤 2014）であることは認識している。田村（2000）が主張するように本石器に施されている削片剥離は樋状剥離というよりは面取り剥離という方が表現としては適格といえるかもしれない。しかしながら、筆者は石器器種名をある意味で言葉の意味とは必ずしも照応しないラベルと考えて

おり、学史的に研究者間である程度共有され、定着している器種名を変更することはかえって混乱を生じさせると感じている。よって本論では「有樋尖頭器」という用語を用いる。その意味では「樋状剥離を有する尖頭器」という方が適格かもしれないが、ラベルとしては少し長いので、提案 (1988) に従った。

- 2) 中部高地の有樋尖頭器石器群と南関東の有樋尖頭器石器群の関係を「尖頭器文化」の傾斜編年によって発生地と伝播地と捉えていた当時の考え方には反論も存在した (佐藤 1991)。同様に製作地遺跡と消費地遺跡といった機能的差として解釈する考え方も示されていた (関口 1992)。
- 3) 本論では詳細な検討にまでは踏み込めなかったが、有樋尖頭器の出土石器群の分布を見ると武蔵野台地南縁部に偏在しているように見える (図 1)。このことは立川面と武蔵野面の連結地域にあるという立地環境と関係があるのではないかと予測している。それゆえ、立川面の成り立ちが分かるデータは重要である。
- 4) 石器集中部名は BL+4 桁の数字で表している。4 桁の数字の上位 2 桁が帰属垂直区分帯を表し、下位 2 桁が垂直区分帯内での通し番号である。
- 5) 各集中部の平面分布、垂直分布などの基本データは報告書 (明治大学校地内遺跡調査団 2016b) 添付の DVD1 の中にすべて収録されている。データの仕様については鈴木・市川 2016 で詳細に解説している。
- 6) BL1502 からは 10 点の「類上ケ屋型彫器」 (鈴木 2017) が出土している。「類上ケ屋型彫器」は彫刀面の向き以外の特徴が上ケ屋型彫器と類似する彫器であるが、彫器の一型式として認定できるかについてはなお検討が必要と考えていた。鈴木 (2018) によって有樋尖頭器群に多く伴う細原型彫器との関係から上ケ屋型彫器の成立過程に関わる石器型式ではないかという見解が示されている。
- 7) 他にも垂直区分帯 18 に帰属する BL1806 から有樋尖頭器削片が BL1812 から 2 点の尖頭器が出土している。BL1806 は N エリア BL1804 西側に近接しており、BL1804 の有樋尖頭器関連資料に含まれるものと考えられる。BL1812 は S エリアに位置し、発掘所見で風倒木痕が絡んでおり、南隣の BL1104 と元は同一の石器集中であったと解釈されている (明治大学校地内遺跡調査団 2016a: p70)。また、垂直区分帯 17 に帰属する尖頭器 3 点の内、BL1702 出土の 2 点は周辺加工で 1 点は尖頭部を持つが、平坦剥離加工の有樋尖頭器とは技術的に異なる尖頭器であり、BL1706 出土の尖頭器は有樋尖頭器であるが、集中部は BL1612 の東隣りに位置し、不透明黒曜石を素材としており、BL1612 と一連の尖頭器ともとらえられる。したがって、BL1804 を除けば、BL1612 の資料が最も下層から出土している尖頭器の一群といえることができる。
- 8) BL1804 出土の尖頭器は 8 点、7 個体である。
- 9) BL1612、および BL1706 以外の BL 出土の黒曜石製尖頭器はすべて透明黒曜石製である。本遺跡出土の黒曜石の

原産地分析は行われていないが、近年、男女倉遺跡など原産地遺跡の黒曜石分析をはじめとして、武蔵野台地遺跡の尖頭器資料の分析も進んできているので、本遺跡尖頭器関連資料の原産地推定分析がより多くの知見をもたらすにちがいない。

引用文献

- 青森県立郷土館 1980『大平山元遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告 8, 114p., 青森
- 堀 恭介 2017「面取尖頭器を所持する集団の地域行動—南関東地方武蔵野台地における事例研究—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』31: 49-69
- 市川雅洋・鈴木美保 2016「垂直区分帯・集中部設定の基準と方法」『下原・富士見町遺跡 III 後期旧石器時代の発掘調査 (1) 石器群の概要と出土状況』明治大学校地内遺跡調査団発掘調査報告書 5, pp.12-14, 東京, 明治大学
- 伊藤 健 1989「樋状剥離を有する尖頭器の編年と変遷」『古代』88: 1-40
- 伊藤 健 1991a「竹橋門地区における「樋状剥離を有する尖頭器」の製作をめぐる」『竹橋門』東京, 国立近代美術館遺跡調査委員会編, pp.319-333 東京
- 伊藤 健 1991b「ナイフ形石器の変異と変遷」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』10: 81-107
- 伊藤 健 2018「後期旧石器時代「武蔵野編年の新地平」—樋状剥離を有する尖頭器をめぐる」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』32: 27-55
- 伊藤 健 2019「樋状剥離を有する尖頭器の編年と変遷 (2)」『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流: 研究の視点』白石浩之編, pp. 129-138, 東京, 六一書房
- かながわ考古学財団 2002『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告 128, 756p., 横浜
- 県営高座渋谷団地内遺跡発掘調査団 1995『県営高座渋谷団地内遺跡』220p., 大和
- 国武貞克 2001「武蔵野台地・大宮台地の面取り尖頭器」『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉』平成 13 年度企画展公開シンポジウム予稿集, pp.31-52., 柴町, 千葉県立房総風土記の丘
- 国武貞克 2003「両面体調整石器群の由来—関東地方 V 層・IV 層下部段階から砂川期にかけての石材消費行動の連続性—」『考古学』1: 52-77
- 栗原伸好 1999「相模野第 III 期と第 IV 期の間—相模野第 III 期と第 IV 期の連続性に関する予察—」『神奈川考古』35: 17-32
- 栗原伸好 2005「相模野台地におけるナイフ形石器終末期の槍先形尖頭器の様相」『石器文化研究』12: 201-208
- 明治大学校地内遺跡調査団 2015『下原・富士見町遺跡 III 後期旧石器時代の発掘調査 (3) 出土石器』明治大学校地内遺跡調査団発掘調査報告書 7, 600p., 東京, 明治大学
- 明治大学校地内遺跡調査団 2016a『下原・富士見町遺跡 III 後期旧石器時代の発掘調査 (2) 石器接合資料とその分布』明治大学校地内遺跡調査団発掘調査報告書 6, 234p., 東

- 京, 明治大学
- 明治大学校地内遺跡調査団 2016b『下原・富士見町遺跡 III 後期旧石器時代の発掘調査(1)石器群の概要と出土状況』明治大学校地内遺跡調査団発掘調査報告書 5, 130p., 東京, 明治大学
- 三宅哲也 1980「大平山元技法 A と B」『大平山元遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告 8, pp.43-48, 青森, 青森県立郷土館
- 森嶋 稔 1975「旧石器文化の中から－特に男女倉技法をめぐって－」『男女倉』和田村教育委員会編, pp.169-173, 和田村, 和田村教育委員会
- 西井幸雄 1994「花ノ木遺跡 先土器時代の遺構と遺物」『花ノ木・向原・柿ノ木坂・永久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 134, pp.23-128, 大里村, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西井幸雄 1996a「西武蔵野遺跡の調査」『丸山／青梅道南／十文字原／東武蔵野／西武蔵野』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 164, pp.34-156, 大里村, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西井幸雄 1996b「武蔵野台地の槌状剥離尖頭器」『丸山／青梅道南／十文字原／東武蔵野／西武蔵野』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 164, pp.157-171, 大里村, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 野口 淳 2015「整理調査の方法と経過」『下原・富士見町遺跡 III 後期旧石器時代の発掘調査 (3) 出土石器』明治大学校地内遺跡調査団発掘調査報告書 7, pp.13-23, 東京, 明治大学
- 小田静夫 1980「武蔵野台地に於ける先土器文化」『神奈川考古』8: 11-27
- 佐野勝宏・洪 恵媛・張 思熠・鹿又喜隆・阿子島 香・柳田俊雄「山形県高倉山遺跡出土ナイフ形石器に残る狩猟痕跡の研究」『東北大学総合学術博物館研究紀要』12: 45-76
- 佐藤宏之 1991「「尖頭器文化」概念の操作的有効性に関する問題点」『中部高地の尖頭器文化: シンポジウム記録集』長野県考古学会研究叢書 1, 長野県考古学会旧石器研究部会編, pp.124-134, 長野, 長野県考古学会
- 関口博幸 1992「槍先形尖頭器の変容過程－相模野台地における槍先形尖頭器の製作と廃棄プロセス」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要 9』: 1-26
- Sisk, M. L., and Shea, J. J. 2011 The African origin if complex projectile technology: An analysis using Tip Cross-Sectional Area and Perimeter. *International Journal of Evolutionary Biology* 2011: Article ID 968012, doi:10.4061/2011/968012
- 総合文化財考古学研究室 2018『日本後期旧石器時代 下九沢山谷遺跡発掘調査研究報告書』132p., 相模原
- 須藤隆司 2005「杉久保型・砂川型ナイフ形石器と男女倉型有槌尖頭器－基部・側縁加工尖頭器と両面加工尖頭器の技術構造論的考察－」『考古学』3: 73-100
- 須藤隆司 2006「両面調整技術構造による石槍の変動－両面調整石槍の出現と地域開発における歴史変動－」『石器文化研究』13: 31-54
- 須藤隆司 2014「削片系両面調整石器－男女倉・東内野型有槌尖頭器の再構築－」『資源環境と人類』4: 39-56
- 諏訪間 順 1983「相模原市長久保遺跡採集の石器」『神奈川考古』15: 17-23
- 諏訪間 順 1988「相模野台地における石器群の変遷について－層位的出土例の検討による石器群の段階的把握－」『神奈川考古』24: 1-30
- 諏訪間 順・堤 隆 1985「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡 第 IV 文化層の石器群について」『旧石器考古学』30: 85-108
- 鈴木次郎 2018「細原型彫器と上ケ屋型彫器－彫器からみた南関東のナイフ形石器石器群の多様性について－」『神奈川考古』53: 1-33
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ (1)』大塚初重ほか編, pp.144-169, 東京, 有斐閣
- 鈴木美保 2015「第 IV 章 まとめ」『下原・富士見町遺跡 III 後期旧石器時代の発掘調査 (3) 出土石器』明治大学校地内遺跡調査団発掘調査報告書 7, pp.589-598, 東京, 明治大学
- 鈴木美保 2016「第 III 章 まとめ」『下原・富士見町遺跡 III 後期旧石器時代の発掘調査 (2) 石器接合資料とその分布』明治大学校地内遺跡調査団発掘調査報告書 6, pp.183-186, 東京, 明治大学
- 鈴木美保 2017「下原・富士見町遺跡出土の「類上ケ屋型彫器」に関する一考察」『ラーフィダーン』38: 61-67
- 鈴木美保・市川雅洋 2016「添付データについて」『下原・富士見町遺跡 III 後期旧石器時代の発掘調査 (1) 石器群の概要と出土状況』明治大学校地内遺跡調査団発掘調査報告書 5, pp.15-20, 東京, 明治大学
- 田村 隆 2000「木刈峠再訪－房総半島小型石槍の変遷－」『千葉県史研究』8: 28-57-
- 東京都埋蔵文化財センター 1996『府中市 No.29 遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告 29, 128p., 多摩
- 東京都埋蔵文化財センター 2017『田直遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告 324, 338p., 多摩
- 堤 隆 1988「槌状剥離を有する石器の再認識 (上)－男女倉型・東内野型と呼称されるある種の石器をめぐって－」『信濃』40 (4): 24-45
- 堤 隆 1989「槌状剥離を有する石器の再認識 (下)－男女倉型・東内野型と呼称されるある種の石器をめぐって－」『信濃』41 (5): 38-64
- 調布市遺跡調査会 2006『都立武蔵野の森公園埋蔵文化財調査: 野水遺跡第 1 地点: 報告書』306p., 調布
- 大和市教育委員会 1999『大和市 No.210 遺跡: 神奈川県大和市つる舞の里歴史資料館建設用地内地点の発掘調査』大和市埋蔵文化財調査報告書 71, 74p., 大和

付表 分析対象尖頭器の属性表

管理 番号	出土 層位	BL	エリア	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	TCSA	TCSP	L/W	T/W	類型	樋状 剥離
12013099	IIc 下	1602	S	Tu	54.8	18.1	6.6	4.9	59.73	29.30	3.03	0.36	A	無
13000576	IVc	1209	S	Ob	33.6	16.6	8.6	3.8	71.38	28.55	2.02	0.52	B2	無
13001370	IVa	1209	S	Ob	49.6	15.3	10.7	5.3	81.86	28.45	3.24	0.70	A	有
13001391	IVa	1209	S	Ob	38.7	19.3	8.9	5.9	85.89	32.43	2.01	0.46	B2	有
21003411	III ~ IVa	1412	S	Ob	28.5	14.6	5.8	2.2	42.34	23.92	1.95	0.40	B2	無
21012025	III ~ IVa	1406	S	Ob	54.1	18.5	7.9	6.9	73.08	30.66	2.92	0.43	A	有
21013281	IVb	1601	S	Ob	43	14.2	7	3.5	49.70	24.17	3.03	0.49	A	有
21014210	IVb	1503	S	An	61.4	29	10.7	14.8	155.15	47.02	2.12	0.37	S'	有
21016111	IVb	1601	S	Sh	49.8	20.8	12	8.5	124.80	36.68	2.39	0.58	B1	有
22000577	III ~ IVa	1210	N	Sh	44.5	18.5	9.3	5	86.03	31.62	2.41	0.50	B2	無
23017601	IVc	1309	N	Ob	62.6	30.3	8.6	10.2	130.29	47.72	2.07	0.28	S'	有
24000360	IVb	1306	S	Ob	43.1	15.9	9.1	4.5	72.35	36.64	2.71	0.57	A	有
24006917	III ~ IVa	1502	S	Ob	38.3	20.4	11.3	5.9	115.26	35.62	1.88	0.55	B1	有
24007751	IVb	1502	S	Ob	37.6	11.7	7.8	2.4	45.63	21.45	3.21	0.67	A	有
24008686	IVb	1501	S	Tu	50.7	22.7	11.1	11.7	125.99	38.58	2.23	0.49	B1	有
24010362	IVb	1501	S	Ob	44.1	14.9	6.5	3.6	48.43	24.79	2.96	0.44	A	有
32057699	III ~ IVa	1404	S	Ob	40.7	18	8.4	4.1	75.60	30.31	2.26	0.47	B2	無
32057814	III ~ IVa	1404	S	Sh	69.8	33.6	19.9	36.9	334.32	78.10	2.08	0.59	S	無
32058883	IVb	1404	S	Ob	30.3	15.8	6.9	2.1	54.51	26.29	1.92	0.44	B2	有
44050374	III ~ IVa	1219	S	Ob	41.8	18.1	8.9	4.8	80.55	30.79	2.31	0.49	B2	有
44050635	III ~ IVa	1208	S	Ob	54.4	28.2	12.2	11.9	172.02	46.85	1.93	0.43	S'	有
MB098500		1221	S	Sh	114.2	39.1	19.2	82.6	375.36	87.12	2.92	0.49	S	有
MB106200		1601	S	Ob	47.4	22.8	9.8	8.4	111.72	37.83	2.08	0.43	B1	有
MB110600		1501	S	Ob	58	19.1	9	7.8	85.95	32.22	3.04	0.47	A	有
21004942	III ~ IVa	1804	N	Ob	28.6	13.9	5.9	2	41.01	23.02	2.06	0.42	B2	有
21008400	III ~ IVa	1804	N	An	37.2	17.1	9.5	5.3	81.23	29.88	2.18	0.56	B2	有
21009955	IVb	1804	N	Ob	32.5	15.5	6.3	2.4	48.83	33.46	2.10	0.41	B2	有
21092326	IVb	1204	N	Ob	28.2	13.4	5.4	1.4	36.18	28.89	2.10	0.40	B2	有
21121423	IVc	1804	N	Ob	31.1	13.6	7	2	47.60	23.36	2.29	0.51	B2	有
21121424	IVc	1804	N	Ob	31.4	14.6	6.4	2.2	46.72	24.31	2.15	0.44	B2	有
22006710	IVb	1226	N	Ob	26.3	15.7	5.8	2	45.53	25.46	1.68	0.37	B2	無
32052546	III ~ IVa	1318	N	Ob	26.6	13.7	8	2.1	54.80	24.23	1.94	0.58	B2	無
MB083200		1804	N	An	35.4	16.1	7.9	3.9	63.60	27.38	2.20	0.49	B2	無
32050742	III ~ IVa	1612	1612	Ob	48	22.7	9.1	6.6	103.29	37.25	2.11	0.40	B1	無
32051157	IVb	1612	1612	Ob	21.6	12.8	5.1	1.2	32.64	27.56	1.69	0.40	B2	有
32051661	IVb	1612	1612	Ch	56.4	28.3	11.3	13.1	159.90	46.41	1.99	0.40	S'	縁辺残
32051773	IVb	1612	1612	Ob	23.6	12.9	6.5	1.5	41.93	22.06	1.83	0.50	B2	有
32052887	III ~ IVa	1612	1612	Ob	27.9	18.2	7.3	3.6	66.43	29.87	1.53	0.40	B2	無
32053448	IVb	1612	1612	Ob	33.7	17.4	8.9	3.7	77.43	29.85	1.94	0.51	B2	縁辺残
32054884	IVb	1612	1612	Ob	28.4	15.1	5.4	1.8	40.77	24.38	1.88	0.36	B2	縁辺残
32057018	IVb	1612	1612	Ob	23.5	13.8	5.4	1.2	37.26	29.64	1.70	0.39	B2	有
32057026	IVb	1612	1612	Ob	41.3	21.2	8.6	4.8	91.16	34.85	1.95	0.41	B2	縁辺残
32057147	IVc	1612	1612	Ch	40.8	24.3	8.9	6.4	108.14	39.36	1.68	0.37	B1	縁辺残
32057288	IVc	1612	1612	Ob	24.4	16	5.9	1.8	47.20	25.94	1.53	0.37	B2	無
MB143200		1612	1612	Ch	40.5	20.4	7.4	5.4	75.48	33.00	1.99	0.36	B2	無
21004146	IVb		BL 外	Ob	29.9	16.5	6.4	2.5	52.80	26.94	1.81	0.39	B2	有
21004184	IVc		BL 外	Ob	84.2	35	11.4	19.3	199.50	73.62	2.41	0.33	S	有
21006864	IVb		BL 外	Ob	36.9	24.1	10.3	7	124.12	39.95	1.53	0.43	B1	有
24006391	IVb		BL 外	Ob	36.6	14.2	7	2.6	49.70	24.17	2.58	0.49	A	有

Origin and development of edge-fluted points from archaeological sites around a catchment area of the Nogawa River: Focusing on the Shimohara • Fujimicho Site

Miho Suzuki^{1*}

Abstract

Edge-fluted points were widespread across eastern Paleo-Honsyu Island in the late Upper Paleolithic period. However, their origin and the process of development in each region are not well understood. On the Musashino Plateau in the southern Kanto region, these materials have been gradually unearthed since the 1990s, and discussion about them has recently become more active.

Shimohara • Fujimicho Site is one sites where several edge-fluted points have been excavated. Over a hundred points have been unearthed, belonging to the several cultural layers of this site. There are no other lithic assemblages of a similar scale so far, and the study on the chronological process of this assemblage is expected to provide important insights into the origin and development of the edge-fluted points around this region.

In this study, I analyz the edge-fluted points from the Shimohara • Fujimicho Site from the above perspectives and present a hypothesis for the three stages of development. In the first stage, several groups such as (the Omegura and Higashiuchino types,) were introduced from outside the area. In the second stage, they were integrated and localized; and in the third stage, they became smaller and uniform. After the third stage, edge-fluted points gradually disappeared and changed into assemblages primarily comprising small leaf-shaped points.

Keywords: edge-fluted point, Shimohara • Fujimicho Site, catchment area of the Nogawa River, Omegura type point, Higashiuchino type point

(Received 13 December 2024 / Accepted 13 January 2025)

¹ Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 1-6-3, Kanda-Sarugaku-cho, Chiyoda, Tokyo, 101-8301, Japan

* Corresponding author: Miho Suzuki (comet35mst@jcom.zaq.ne.jp)